

長安・洛陽両都の 遺跡整備状況

1 はじめに

近年中国では大規模遺跡の保存と活用を都市開発とも関わらせながら進めている。唐代の長安・洛陽両都の都城遺跡の整備も進んでおり、2015年10月の現地調査およびヒアリングを踏まえてその概要を記す。

2 国家考古遺跡公園とは

中国国家文物局発布の『国家考古遺址公園管理辦法(試行)〔=文物保発〔2009〕44号〕』すなわち、『国家考古遺跡公園管理規則(試行)』は大規模な遺跡の保存と活用の方向性を示したものである(遺址は日本語では遺跡にあたる概念である)。国家考古遺跡公園とは都市公園の種類の一つではなく、大遺跡の保護と展示において全国的なモデルとなる意義をもつ特定の公共空間で、国家文物局が認定する称号である。

国家文物局が2009年12月23日に示した『国家遺址公園評定細則(試行)』の内容には国家考古遺跡公園としての評価内容と評価基準が示される。評価内容は①考古遺跡公園の資源条件、②遺跡の考古学研究と保護、③遺跡の展示と解釈、④遺跡公園の管理と運営に大別され、それぞれ細目があり、それらは必要指標と付加指標に位置付けられ、配点が決まっている。合計点は800点であり、国家考古遺址公園に認定されるためには、全体で600点が必要であるが、四項目それぞれについて80%以上の得点と、付加指標の総得点100点中50点以上が必要とされる。

国家考古遺址公園実績と計画案件 中華人民共和国中央政府HPによると、国家考古遺跡公園の認定申請の第一陣で公表され(2010.10.11)、開設された国家考古遺跡公園は北京市の圓明園、周口店、吉林省の集安高句麗、江蘇省の鴻山、浙江省の良渚、河南省の殷墟、隋唐洛陽城、四川省の三星堆、金沙、陝西省の陽陵、秦始皇陵、大明宮の12カ所で、計画中のものは23カ所である。

第二陣(2013.12.18)で、開設された国家考古遺跡公園は遼寧省の牛河梁、吉林省の渤海中京、黒竜江省の渤海上京、江西省の御窯庵、山東省の曲阜魯国故城、大運河

南大汶口南旺枢紐、河南省の漢魏洛陽故城、湖北省の熊家塚、湖南省の長沙銅官窯、庵西の甌皮岩、重慶市の釣魚城、新疆ウイグル自治区の北庭古城の12カ所で、計画中のものは31カ所である。

本報で紹介する唐長安城の大明宮跡、隋唐洛陽城跡はいずれも第一陣で認定されており、今後国家考古遺跡公園の認定が多数増えるものと思われる。

成立の背景と特徴 国家文物局が「円明園遺跡保護計画」を承認した2000年頃から「遺跡公園」という概念が人々の間で広がった。その後の数年間、国内の文化財主管部門と学会は、大遺跡に関するシンポジウム等をおこない、「大遺跡保護展示モデル園區」または「遺跡公園」の用語を使い、シンポジウムなどで内容を検討してきた。大遺跡で都市部に位置するものはその保護と都市的土地利用の矛盾を抱えており、考え出されたのが国家考古遺跡公園である。

『国家考古遺跡公園管理規則(試行)』は公園の運営資金の仕組み、経営の仕組み等については明確に定めていない。現行の資金調達の方法は財政支出による財政ルートと、入場料等の市場ルートがあり、それぞれの公園でその割合は異なる。

国家考古遺跡公園に認定されることの利点は称号を得られることであり、若干の財政的支援もある。

3 隋唐洛陽城跡の整備

全体計画 隋唐洛陽城跡の整備の全体計画については『隋唐洛陽城址保護総体計画』(2010.7)に記される。

東都洛陽は中央を東流する洛河の川筋が当時とは変わっており、失われた里坊部分がある。洛陽城跡の現在の土地利用状況は、洛北は市街地になっており、洛南は集落が点在する農村部といえる。城門跡は発掘または探査によって遺構や位置が確認されているものがあり、城壁は残存する部分と滅失した部分が明確にされている。里坊道路遺跡についても発掘または探査によって確認されており、洛北では一部、洛南では多くの部分が残される。

『文物保護法実施条例』第九条では、文物保護単位(日本でいう史跡)の保護範囲はその本体とその周囲としている。周囲の範囲は種別や規模、歴史的環境、現在の状況によって異なり、一定の安全な距離を取るようになっている。文物保護単位を含む、遺跡の重点保護区は宮皇城

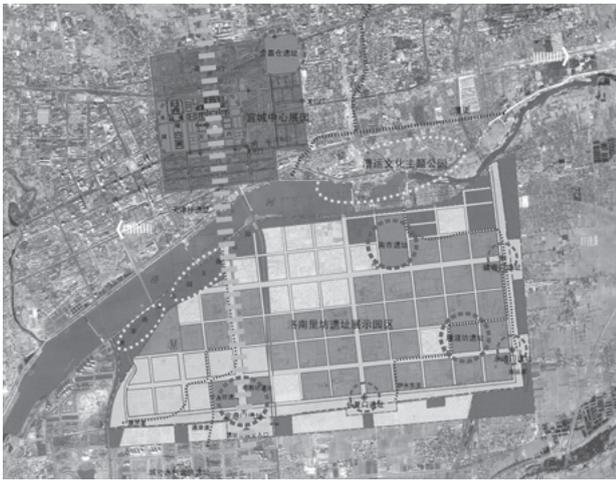


図24 隋唐洛陽城整備基本構想図

主要部や洛陽城の一部の街区に限定されている。

宮皇城遺址区を詳しくみると、宮城の中心部とその北側、および含嘉倉地区が重点保護区になっており、他は一般保護区で、段階的に整備を進めている。宮城地区と含嘉倉地区については、史跡整備をおこない、城内の区画割りを示す城壁跡には「城垣城址緑化帯」を設け、将来的には宮皇城地区については公園的な整備がなされるようである。一方、洛北の洛北里坊遺址区については城壁を除いて整備は考えていないようである。

洛南は農村部で、街路跡の地割りも遺存しているようであるが、近年は各集落域の拡大が見られる。将来的な計画は図24の通りである。集落を移転・集約し、当時の道路跡を復元する。城門・城壁および定鼎門内東西の明教坊・寧人坊、白居易宅のあった履道坊、南市のあった豊都市坊については史跡の保存と整備をおこなう。また、それらを有機的に繋ぎうる街路の一部も重点保護区に指定しており、他の街路跡より優先度は高い。史跡整備や集落以外の街区では農地を温存させる。洛南の城壁の南面と東面については幅広く建築の規制範囲を設け、緑地として整備する。これらの計画は大規模であり、実現性は不透明であるが、洛河に架かる天神橋など皇城と定鼎門を結ぶ軸線については計画が進行しているようである。

現在の状況 宮皇城地区の中心部にある明堂跡と天堂跡(図25)、含嘉倉地区の一部、洛陽城正門の定鼎門跡(図26)が完成し、九州池・皇城正門は工事中で、宮皇城周辺はまだ諸々の建物が建て込んでいる状況である。

明堂は天宮とも呼び、隋唐洛陽城の中軸線上の最大最高の建築で、武則天時期に外朝の正殿だった。覆屋は2010年6月開館。高さ約20m、幅約105m、外観は三層の基壇を成し、屋根は八角の寄せ棟、総面積は10,000㎡。内部は二層、一階は中心柱穴遺構を見せる遺構展示館、基壇上の二階部分の中心には武則天の玉座の展示がなされる。築地回廊の立体表示は照明入りのガラスの円柱と



図25 天堂跡と明堂跡



図26 定鼎門跡



図27 紫宸殿跡



図28 大明宮全体建築模型

壁体で構成され、遺構表示としては挑戦的である。

天堂は明堂の北西約100mに位置する。外観五層、内部九層の円塔で、基壇内部が遺構展示館になっており、上階は展示に充てられている。

4 大明宮国家考古遺址公園

唐長安城の大明宮跡には遺跡保護だけでなく、スラムの撤去、経済発展、都市の発展と調和する遺跡公園の建設が求められ、三年で整備し、大明宮国家考古遺跡公園は2010年10月に開園した。年間5,000万人来園。総面積は3.5kmあり、整備費は120億元、内80億元が立ち退き等に、40億元が公園整備に使われた。西安市は公園を含む街区19.2kmの都市計画の権限を得て、その税収を公園整備に充てる制度を創設した。

公園内は全体の2/3が無料区、1/3が有料区である。映画館も設けられ、当初は遺跡に関わる教育的な内容のものだけの上映だったが、一年ほどしてからは一般の映画も上映するようになった。映画館入館料は公園の入場料に含まれており、街中と同価格で映画と公園を楽しめるため公園の集客施設となっている。

当時の建物の外観をイメージした大明宮正門の丹鳳門跡の遺構展示館(上層の門楼内は大ホール)や含元殿跡の基壇整備、紫宸殿跡のボリュームとシルエットをイメージさせる建物の表示(図27)、太液池の復元的整備、大明宮全体の1/15建築模型露天展示(図28)等がある。

宮殿区画毎の要所に、ガラスケースに入れた建築模型と復元CG大型屋外展示を併用し、往時の様子をイメージしやすいように工夫している。

5 まとめ

中国は土地制度が異なるため、遺跡整備の手法や速度も異なるが、大規模遺跡の運営や展示で参考にすべき点もあり、今後も注視していきたい。(内田和伸)